

五月十二日

昨日早稲田大学大隈講堂で鈴木博之の講演会があり出掛けた。元氣そうで安心した。ル・マルスの田中さんの依頼で「住宅の街路化」のような事を書いた。確か田中さんは津野海太郎の友人だった人で、要するに生前の小野二郎と交友があった。久保覚という懐かしい人も居たな。

小野二郎の不在はやっぱりどう考えてみても痛手だった。住宅の街路化はその小野の小エッセイであった。ウィリアム・モリス主義者であった小野二郎のことを田中さんは思い出させてくれた。世田谷村でささやかにやり始めている事と、ウィリアム・モリスのことが結びついているよと遠くから指摘してくれたのだ。わかってはいたんだけど他人から言われるとわかり方が深くなる。

私が今やっている事、特に日常生活品をインターネットで市場に流していることとする事、住宅もいづれそうすることは、コンピュータを手に入れたモリス工房の活動なのだ。手作り、職人の仕事、総じてモノ作りは今余りにも情けない状態である。勿論装飾も。世田谷村でやりかかっている事の本質はどうやらそれらしい。らしい、なんて情けない言い方は申し訳ないが、職人芸術建築ワークショップを母体とした早稲田パウハウス佐賀の三年間もどうやら事の核心はそうだった。

B・フラー、川合健二、J・ブルーヴェエへの持続的な関心の母体もそれであった。その事を明らかにしたい。ただし戦略として

コンピュータの通信能力の拡張を主軸としなければならない。現代の技術の中心は通信、つまり様々な通信能力の拡張という事だ。それを核に据えると何が想定され得るか。モノイメージを飛躍的に開放してゆく事ではないのか。開放という意味は通信、交流つまりコミュニケーションの拡張につながるだろう。これは間違いない。

私が家族の反対を押し切って世田谷村日記をインターネットに垂れ流し続けるようとする事の本質、原理もそこに行き着く。

「建築家、突如雑貨商となり至極満足に生きる」という私の一番か二番かに変テコリンな本もそこに行き着く筈だった。私の性格がチョットとねじ曲っている風があつて、その事が率直に伝わらなかつた嫌いがあつた。そのあんまり役に立たないねじ曲り方はもう捨てる時期に来ている。チョットと惜しいけれどね。

だいぶ昔のことになってしまったが、津野海太郎がモリス日報だったが、モリス新聞を出そうぜという話があつて、立ち消えた。今なら出来そうだ。世田谷村日記、通信をグレードアップすれば良いのではないか。

ウィリアム・モリスの工房の日常を克明に再現してみるとというのが津野海太郎の考えの主旨であつた。まあ、非力と無知を覚悟でそれらしきをするしかないだろう。

ひろしまハウス・ブロンペンのレンガ積みツアーは秋からワークショップ形式にする。装飾の問題に今の日本で立ち向うのは余りにも労が大きく得られるモノは小さい。それならばブロンペンでやれば良いのだ。カンボジアは今こそ装飾芸術が必要な場所なんだから。考えてみよう。

世田谷村では今、五月中に三〇種の日常生活環境用品をインタ

ーネットに流そうという計画を進めているが、コレはどうやって
も、デザインの水準をとやく言う前に実現しなくてはならない。
平山がやっているトタンの椅子も仲々よろしい。サッカーじゃな
いけれどスピードと展開力が問題なのだ。屋上菜園の矢車草が満
開である。

昼前、聖徳寺現場。住職とゆっくり話ができて良かった。夜日
経コラムを書く。この連載は面白かった。もうすぐ終るのが残念
である。

五月十三日

九時定例ミーティング。ミーティングというより伝達の確認に
なっているが、仕方ない。オープン・テック・ハウスのインター
ネットへのプレゼンテーション。日常生活用品のプレゼンテーシ
ョンに関して指示。六月六日の石山研のホームページは必見です
ぞ。

菜園で毎朝イチゴとさやえんどうがとれて助かっている。

世田谷村新聞は今のところ余計なモノの様なので休刊とする。
中途半端なのだ。活字で新聞まがいをやっても意味がないことが
読者の反応でわかった。

今二十四時前。今日は一日よく打合わせをして、良く考え、良
くスケッチもした。キッチンと疲れた。しかし何も進んでいない様
な気もする。